

陳舜臣さんを語る会通信

NO.74

Jul.

2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年7月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

最初期の推理短編集『桃源遙かなり』と『紅蓮亭の狂女』

1961年、『枯草の根』で作家デビューした陳舜臣さんですが、以後、奥様に「体重が四十キロを割れば小説を書かない」と約束させられる(本通信No. 68)ほどの殺人的スケジュールでの執筆が続きます。この時期、紙誌への掲載、書き下ろし出版を併せ、^{おびただ}夥しい本数の作品(ほとんどが推理小説)が発表・刊行されました。

この内、本号から数回、中短編集を紹介していきます。すでに、『方壺園』は本通信No. 53で、『青玉獅子香炉』はNo. 19で取り上げていますので、この2冊は除きます。まず『桃源遙かなり』(1965 講談社)と『紅蓮亭の狂女』(1968 講談社)です。(編集委員 橘雄三)

徳間文庫版 岡本好古「解説」より抜粋引用

傍線は編集委員の加筆

(一九八五 徳間文庫版表紙表紙写真は陳立人氏撮影)



かの叙景をほううつさせるほどである。

本書は昭和三十八年三月号、三十九年八月号まで、三つの小説誌に発表された中篇、短篇の作品集である。デビューから直木賞受賞までのほぼ半ほどの時期に当たるが、意気軒昂な登場の余勢がまざまざと読みとれる、メリハリの利いた秀逸な佳品ぞろいである。

現に本書もそうだが、氏の作品のタイトルや文脈中には、「遙か」「流れ」「江水」といった語がしげく見出だされる。これは氏が中国人、日本人両方の観方をそなえた複眼作家であることのあらわれといえよう。

また、それがつねに陳文学のモチーフとなり、陳氏の心象風景の核をなしている、と私は推察する。

氏は昭和三十六年『枯草の根』で、第七回江戸川乱歩賞を受賞して華々しく文壇に登場した。以後、せきを切ったようにおびただしい作品の発表ぶりは『山腹全面、みるみる蜀軍の旗印と化す』という三国志のな

ある意味で、陳氏の文学を決定的に方向づける重要な時期であり、その創作のメティエと資質、乃至、素材、とくに人物への眼などがよくうかがえ、陳文学研究者には必須の資料である。氏のほとんどの作品に一貫している一つの傾向は「面従腹背」「権謀術数」「外面菩薩、内面夜叉」などの雑木林である現実を描き出しながら、何人も孤独で物哀しく、非力な個人であり、その本姓はいたって善良で、常に安らぎを欲している一と、単純ないい方だ

が人間を愛情をもって、肯定的に見る姿勢である。いわば性善説的な視点がうかがえる。

■メティエ…技巧、腕の冴え

題 初出

『桃源遙かなり』 各編紹介(1)

(文庫版岡本好古氏「解説」をもとに)

桃源遙かなり
『小説現代』
昭和39年8月号

武陵の桃源や浦島太郎の竜宮滞在を思わせるロマン。終戦の翌年、シンガポール在住の中国人呉景雄は、日本語の能力を見込まれて、軍事裁判の資料調査の仕事に東京へ呼び出される。殺伐な仕事に絶えられず数ヶ月で辞職し帰途につく。搭乗機がバイヤス湾上空にさしかかった時、眼下の島々のなかに、琵琶山を見きわめようと眼をこらす。呉景雄は、十五年前の甘美な思い出に入っていく。当時、呉景雄は広州市の女学校で絵画の教師をしていたが、劉碧水という生徒を通じて、その美貌の母親映運と知りあう。映雲は、実は、琵琶山海賊を統べる女頭目だった

『天球は翔ける』で甦った
「桃源遙かなり」

『天球は翔ける』は、一九九九年元日から一年間、毎日新聞朝刊に連載されました。主人公梅天球は琉球人で、中国福州の「琉球館」で進貢貿易に従事している時、琵琶山を拠点とする海賊に捕らわれ、アメリカへ渡ることに。この海賊の女親分が阿杏。島の掟でつかの間の夫婦となった日本人・林和十と秘密裏に連絡を取りあっている。アメリカに向かう琵琶山一行のリーダー。こう述べてくると、女親分の相手の男性が、「桃源……」では中国人で、『天球……』では日本人ですが、話の大筋はよく似ています。「桃源……」から三十五年、『天球……』で甦ったといった感じです。

詳しくは本通信No.38参照。



毎日新聞社発行単行本の表紙

『桃源遙かなり』 各編紹介(2)

題 初出	『桃源遙かなり』 各編紹介(2) (文庫版岡本好古氏「解説」をもとに)
揺れる 『小説中央公論』 昭和38年4月号	カルカッタ航路の英国船、ハンチョウ号の中国人船員、楊(ヤン)の物語、というより、生まれつき制約された人間の秘話というべき中篇。楊は蛋民(たんみん)である。水上生活者が余儀なくされるいびつな人生観とは恐ろしいもので、蛋民しかもてない、水上にあることの安定感を読んで行くうちにひしひしと感じさせる。船が神戸に着くと、楊は情婦・八重子のもとへかけつける。ドアをあけると、そこには彼女の死体が…
香港便り 『オール讀物』 同39年8月号	貿易会社出張所長、杉尾は香港に着いて、二十数年前、自分をすんでに射殺するところだった重慶側の工作員鄭子健と再会する。杉尾も当時日本の特務機関員だった。その頃はどちらの陣営にも、きちんと仁義を弁まえて、情報を売る「情報販子」というスパイ商売人がいた。鄭もその一人だったが、この道のベテラン潘信沢に杉尾はひそかに再会してみたかった。この潘ももう七十歳をこえているはずである。やがて、神話的人物・潘の娘艶珠が杉尾の前に現われて、世にも奇妙なことを懇願する…
燕の影 『小説中央公論』 同38年10月号	蘇曼殊大師は若くして当代随一といわれた在日の中国人詩僧である。曼殊は、健啖が祟り、腸の疾患のため、三十五歳で夭折してしまう。本篇の大部分は、それ以後の蘇曼殊の肉親知己の、各様の故人への評価と批判の格闘ともいべき内容。■本通信No. 17参照
天山に消える 『オール讀物』 同38年3月号	NHKの〈シルクロード〉の大眺望を借景にしたようなドラマである。共和国になったものの、中国全土が軍閥の割拠で混戦状態にあった1933年、舞台は新疆省の省都ウルムチ周辺である。ウルムチの東北百マイルの町五台は梟雄馬雲昇の軍団の本拠だった。南京政府派遣団が団長陳開明に率いられて、五台へ平和交渉におもむく。一行には、馬雲昇と五台の故郷を同じくする、青白き秀才、易念光が加わっている。かつて五台の町で、劣等生、片や、町が誇る秀才と、いいはやされた、馬雲昇と易念光の再会となる。この二人に、いまは將軍夫人となっている、この町の名家の娘秀蘭が絡む

『桃源遙かなり』補足(1)「揺れる」
蛋民ヤンと無国籍者イワン

カルカッタ航路の英国船、ハンチョウ号の司厨員楊(ヤン)は、香港海辺の水上生活者、蛋民の子であった。たえず「揺れる」舟上生活に、むしろ安定を感じる習性が身についている。陸のうえの人たちは、彼らを軽蔑して、まるで一段下等の人種—いや、動物のよう扱った。

この物語では、日本生まれの白系ロシア人で無国籍者のイワンも重要な役割を演じる。彼はヤンに寄り添い、ヤンの情婦八重子の殺人事件で容疑者扱いされるヤンを救うために真犯人を捜す。

蛋民や無国籍者など、社会の底辺での生活を余儀なくされた人たちに寄せる陳舜臣さんの眼差しは温かい。

補足(2)「燕の影」
蘇曼殊は自家薬籠中の物

「燕の影」は蘇曼殊(一八八四—一九一八)にかかわる内容です。陳舜臣さんは、『残糸の曲』でも蘇曼殊に相当な紙幅を割いています(本通信No. 15及び17参照)。執筆は「燕の影」(上の表)、『残糸の曲』(一九七〇年『週刊朝日』連載)の順です。『よそ者の目』所収「横浜中華街」でも蘇曼殊に言及している。陳舜臣さんにとって蘇曼殊は自家薬籠中の物と言えます。



本名は蘇玄瑛。曼殊は僧名。字、子穀(子谷)。蘇曼殊、兄の蘇焯、姪の蘇紹瑒、すべて実在の人物です。蘇曼殊は中国人を父、日本人を母として横浜に生まれ、清末の革命運動に参加、また、バイロンやユーゴーの訳詩でも知られ、中国の若者に大きな影響を与えた人物です。蘇曼殊は僧籍にあったということもあり、僧衣の画像をよく目にします。

(右の画像は ja.wikipedia.org/wiki/蘇曼殊より転載)

ところで、蘇曼殊の出生について、父母ともに日本人とする説もあり、蘇曼殊を語るとき、血統の問題はついて回ります。

補足(3) 新疆を舞台にした作品

陳舜臣さんには、本号に取り上げた「天山に消える」、「ウルムチに消えた火」ほか、新疆を舞台にした作品がいくつもあります。

まだ取り上げていないが、『笑天の昇天』収録「笑天の昇天」もそうです。

『紅蓮亭の狂女』 各編紹介

題・初出	『桃源遙かなり』 各編紹介 (尚文社 電子書籍版キャッチコピーより)
紅蓮亭の狂女 『オール讀物』 昭和43年1月号	明治十八年(一八八五)、朝鮮を舞台に風雲急を告げる日本と清国。清国の対日政策の動向を探るべく、密偵の古川恒造は、光緒帝の従兄弟であるとかく噂が絶えない遊蕩児「十刹海の貝勒」こと載激に接近した。貝勒の命ずるまま、古川は邸内の「紅蓮亭」で白い膚に青い瞳の迷の狂女と出会い女は過失で死ぬ。そして数日後、要人との宴会を終えた載激は両眼をえぐられ殺された。紅蓮亭の迷の狂女と載激の殺害、その背景は四十数年前の阿片戦争に溯る。女の故郷は阿片戦争で最も凄惨な戦闘、殺戮と掠奪と強姦のあった町・鎮江であった。 1994年 毎日新聞社(コンパクト版)表紙 → 
スマトラに沈む 『オール讀物』 同40年12月号	郁達夫は終戦直後スマトラで日本の憲兵に暗殺されたといわれる。郁達夫を連行して行ったのは中尉一人だけだった。ひき立てて行ったというよりは、まるでいたわりでもするように。彼ら二人が闇に消えてから三十分以上たって、遠いところで、二発の銃声がきこえた。ほんとにかすかな音であった。
空中楼閣 『オール讀物』 同40年3月号	本社が倒産して失業中の香港駐在員村尾俊三は戦時中には、敵方の諜報部の幹部で知れたヘンリー・ブランドの紹介で、東南アジア華僑の大立物李欣信の通訳に採用される。通訳として知り得た情報を秘密裏にもう一人の雇人に提供する条件で。李欣信、ブランド、匿名の雇人による華僑資本の海外逃避をめぐる企業スパイ戦が始まった。
七十六号の男 『オール讀物』 同39年11月号	李士群は出世欲のかたまりのような男である。『七十六号』の主任は丁黙邨で李士群はその副。丁・李の暗闘が始まる。李は女学生の鄭蘋如を使って丁を追いおとす。李の野心は汪政権を牛耳る蔭の実力者になろうと志したが、重慶軍統と日本軍を敵にして……。知られざる七十六号の実相。
角笛を吹けど 『小説新潮』 同42年9月号	香港の出版社大啓書局に奇妙な依頼と原稿が届いた。原稿は戦争末期の上海での地下工作員の逮捕に関する記事で、依頼は記事のタイトルを表紙に刷り香港、台湾で広告してほしいとあり、三百香港ドルの小切手が添えられてあった。大啓書局は依頼に応じた。その結果……。
ウルムチに消えた火 『別冊小説新潮』 同42年第65号	辛亥革命(1911年)のあと、中国の中心部では軍閥の混戦が続いたが、新疆はふしぎに平和であった。老荘思想の持ち主であった独裁者楊增新が新疆を支配し十七年もの間平和を保ったが、それは近代化とは遠い「無為」を重んじた政策で青年たちの夢をくだくものだった。
鉛色の顔 『推理小説研究』 同41年7月第2号	台湾出身の女形張阿火には十四歳の初舞台から豪商や大官など一流の鼻肩筋がついた。張阿火は祝儀などをよく散じ、たちまち取り巻きができた。楚々たる美女に扮したが、舞台をおりると、さながらやくざの頭目だった。そのころ清仏関係が決裂し、フランス艦隊が台湾基隆(キールン)砲台を攻撃した。張阿火は自力で義勇軍を募り、フランス艦隊と戦った。清仏間に和議が成立すると張阿火は義勇軍をそのまま海賊にして最後に仏船モンブラン号を襲うが失敗。文無しの張阿火は再び役者に。そしてある日、元モンブラン号の水夫長が広州沙面の租界で殺された。殺害時間に張阿火は舞台上に立っていたというのが……。

今や、陳舜臣作品も
電子書籍版の時代

いまは、スマホで電子書籍を読む時代であることはわかっていたが、その波が陳舜臣作品にまで及んでいることは知らなかった。『紅蓮亭の狂女』所収の七編すべてに電子書籍版(尚文社)が存在する。

一例を挙げよう。『紅蓮亭の狂女』所収の一篇「鉛色の顔」だけでなく、価格は税込みで三三〇円。『台湾野史拾遺(ある女形と清仏戦争)』という副題が付いている。副題はありがたい。他では、『紅蓮亭の狂女』には「中国近代歴史小説(阿片戦争秘話)」、「スマトラに沈む」には「中国近代歴史小説(詩人郁達夫の失踪)」、「ウルムチに消えた火」には「中国辺境歴史異聞(独裁者楊增新と革命)」、「空中楼閣」には「香港戦後秘史(ある企業スパイ戦)」と、副題が付いている。

尚文社電子書籍版の表紙



『紅蓮亭の狂女』『紅蓮亭の狂女』の主題は？

尚文社の電子書籍版では、「紅蓮亭の狂女」に「中国近代歴史小説〈阿片戦争秘話〉」という副題がついています。的確なキャッチフレーズです。このことについて見ていきます。枠内、傍線は編集委員の加筆。

「紅蓮亭の狂女」から抜粋引用します

主人公古川が「狂女」を描写した箇所です。

整った顔だった。鼻筋が通って、高く、そして鼻翼はノミで彫ったように、鋭い線でしめくられていた。みひらいた眼が、おどろくほど大きい。（瞳が青味を帯びている。……）

「紅蓮亭の狂女」の最後のくだりです。

「この人の姉さんは」と、瑤英が身をのりだすようにして言った。「ほんとに気の毒な人でした。わるい星の下に生まれたんですね。頭のたしかなところから、人に化物扱いにされて。……あたしだって、このとおりからだが大きいんで、化物扱いはされましたけど、この人の姉さんは、そのうえに、すこし毛色がかわってましたからね」

「王さん、あなたの姉さんはいくつでしたか？」

と、古川はきいた。

「四十二です」

「あなたの故郷は鎮江でしたかね？」

「ええ」

「そうでしたか。……」

（……で、阿片戦争の一コマ、鎮江攻撃時の英軍の残忍非道ぶりが詳述されます。）

陵辱をうけて生き残った婦人のなかで、その翌年にお産をした者もあるだろう。生まれた子どものうちの何人かは、わるい星を頭上にいたっていた。古川は紅蓮亭の女を思い出して、めまいをかんじた。

「そうだったのですよ。そのときおふくろは……」

陳さん怒る！「西欧ヒューマニズムの正体」

本通信No. 72で取り上げた『よそ者の目』『西欧ヒューマニズムの正体』（一九六八年二月二八日朝日新聞夕刊 左画像）から、抜粋引用します。

私は小説を書くために、一八四〇年の阿片戦争のことをしらべて、英軍の残忍な行為をいろいろと知った。清国軍の敷設した地雷原を、英軍はそのあたりでかり集めた中国人を先頭に立てて踏ませている。イギリスの軍隊は、そのあとから要塞に突入するのである。鎮江攻撃のさいの英軍の残忍非道ぶりは、とくに目をおおわせる。掠奪と殺人と女性への暴行で、鎮江は死の町と化したのだ。この阿片戦争当時のイギリス本国はどうであったか？まさしくヒューマニズムの花ざかりだったのだ。産業革命によって近代的な機械という巨人が生みおとされ、人びとは人間が機械の奴隷になるかもしれないという恐怖をもった。オクスフォード運動で代表される、人間尊重の理想主義的な運動が澎湃としておこっている。児童の労働を制限する人道的な法律が制定されたのは、阿片戦争の七年まえであり、つづいて奴隷制度が禁止された。

このような時代的背景で、イギリスは阿片戦争

その陰で残虐行為

狭い白人中心の利己心秘め



という弁解の余地のない不義の戦争をおこし、その戦争でかすかずの残忍な行為をおこなった。舞台が井戸のそとだったから、としか解釈のしようがない。

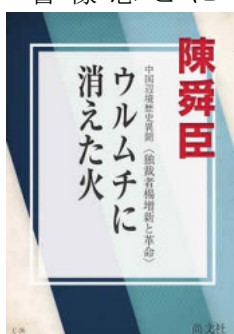
『紅蓮亭の狂女』補足(1)
台湾を舞台にした小説「鉛色の顔」

「鉛色の顔」の尚文社電子書籍版には「台湾野史拾遺（ある女形と清仏戦争）」という副題が付いています。

台湾を舞台にした長編は、『怒りの菩薩』しか思い浮かばないのですが、短編では、『胡蝶の陣』所収「シンカンの若者」（本通信No 67）、『三本松伝説』所収「祖師廟にて」（本通信No 71）と、今回取り上げた「鉛色の顔」があります。私が読んでいないだけで、もつとありそうな気がします。

補足(2) 楊増新を中心に据えた「ウルムチに消えた火」

楊増新は、陳舜臣さんにとって気になる人物です。楊増新が登場する小説、エッセイは多いが、楊増新を中心に据えた小説はこれが一番かと思っています。（画像は尚文社電子書籍版）



補足(3) 詩人郁達夫を描いた「スマトラに沈む」

大変興味深く読みました。郁達夫の最期？に至る時期を描いています。